

はしがき

日本でも、世界でも、今までにない大きな変化が次々と起こり、私たちは、そのまっただ中にいます。家庭でも、学校・職場でも、すなわち、日々の生活の端々で、変化が生じています。これまでの人間関係や環境が大きく変わろうとしています。変化は一つ分野や側面に限られず、全体的、構造的であり、同時的であり、しかも、急激に起きているといえます。このような変化をどのようにとらえたらよいのでしょうか。そこから何が生まれ、私たちにどのような将来をもたらすのでしょうか。現在の変化・変動は、私たちに根本的な発想の転換、少なくとも、何らかの原点に立ち返った考えを求めているようです。

本書は、このような問いに少しでも応えようとした立命館土曜講座から生まれました。土曜講座は、二〇〇九年二・三月に、「混迷する世界と日本」と題して、前年二〇〇八年九月に生じた米国発の金融・経済危機、一月のアメリカ大統領選挙でのオバマ氏の当選、日本における雇用・年金・福祉問題の噴出と政治・経済の混迷をテーマにした連続講座を開催しました。さらに、同年八月末の総選挙による自民党から民主党への政権交代をうけて、一月に「雇用の喪失と克

服の展覧」、一二月には「現代社会と大学生・大学教育」をテーマにした連続講座を開催しました。

本書は、これらの土曜講座の中から、「日本と世界の現在とこれから」および「雇用と若者の現在とこれから」を扱ったものを選び、日本の「平和・戦争」を論じた二〇〇七年の土曜講座の一部を加えて、編成しました。さらに、事態は刻々と変化したこともあり、昨年の暮れに行った編者による「座談会：日本は変わるかP」を加えました。執筆にあたっては、できるかぎり、当日の講座を再現する形をとり、各章末には聴講者との応答も付してあります。

本書の企画趣旨は、日本と世界の現在を市民とともに見る、考える、将来を展望することです。これは立命館土曜講座の当初からのねらいでした。というのは、立命館土曜講座は、敗戦直後の一九四六年三月三十一日、学長であった末川博先生が、「学問や科学は国民大衆の利益や人権を守るためにあること、学問を通して人間をつくるのが大学であり、大衆とともに歩く、大衆とともに考える、大衆とともに学ぶことが重要」であるとの信念をもって、第一回「労働組合法について」を行ったことから始まっているからです。

本書が取り上げるテーマは、どれも現在の時事問題なのですが、事柄の本質を見抜き、これを説明することは、最も学問的な努力を要し、この意味で、大学に最もふさわしい仕事であるといえます。本書を読まれる方は、どの章から読み始めてもかまいません。興味を持ったテーマ、章から始めてください。場合によっては、最後の編者の対談から読み始めるのもいいかもしれませ

ん。本書が全体として、今、生じている変化・変動が何で、何を私たちに問いかけているかを考えるきっかけになったら幸いです。

土曜講座の企画から出版に至るまでに、たくさんの方々からのご協力をいただきました。厚くお礼を申し上げます。それは、まず、何よりも、この土曜講座の講師と聴講者に対してです。毎週土曜日、末川会館に足を運んでくれる熱心な市民の方々があつて、はじめて今日まで続いてきました。次に、執筆者の方々に対してです。編者からのあれこれの注文を甘受してもらいながら、事態の早い進行に、私の不手際が加わって、出版時期を逸し、書き加えなどのお願いもしました。また、講座の開催事務、録音・テープ起こしなどの事務を担った職員の方と法律文化社編集部の小西英央さんに心からの感謝の意を表します。最後に、謝意をもって、本書が立命館大学学術出版助成を受けたことを記します。

二〇二二年二月

大久保 史郎